スポニチは読者の投稿を募集しています。ジャンルは問いません。送付先はメール〈yakyuu-o@sponichi.co.jp〉またはファクス（☎06（6346）8574）まで。〒住所、氏名、年齢もご記入ください。

今岡07年の相棒見つけた

バット工場を見学

天才打者が原点に立ち返った。阪神・今岡誠内野手（31）が5日、愛知県豊川市のアシックス協力のバット工場を訪問。バット作り30年の職人・鈴木隆三氏（53）に復活にかける07年型モデルの作製を依頼した。

「手に負担のかからないものを探しにきた。握りやすいのがテーマ。打者にとってバットはデリケートなものだし、いい機会だと思う」

今季は右手中指のバネ指を手術し、右手首に死球も受けた。シーズン終盤は負傷した右手の負担を考慮して、握りやすさを理由にグリップ部分の太いものを使用したが、結果は出なかった。

「握りやすさ」テーマに作製依頼

「キャンプ、オープン戦で試していかないことにはシーズンで使用するバットは決まらない。でも今日は3種類ほどのレパートリーを増やしておきたい」

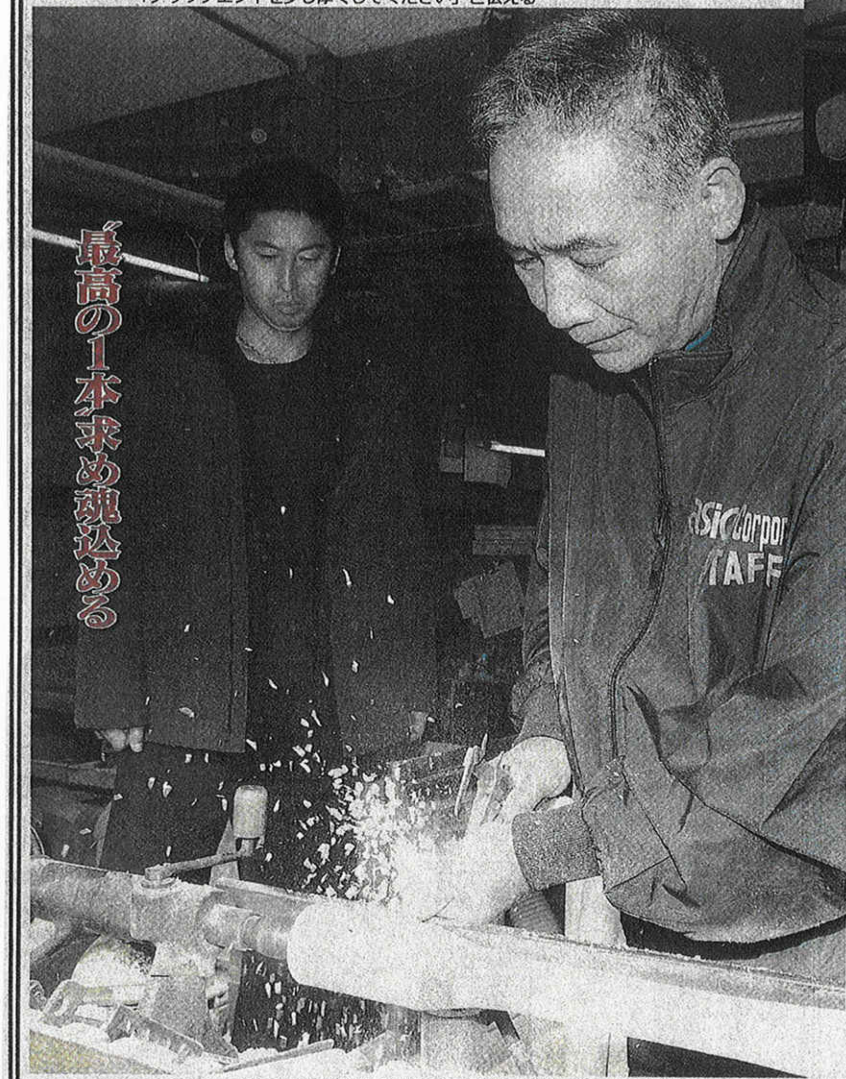
この日は従来型のバットとグリップエンドを太くしたものを1種類。さらに11月の日米野球でサンプルとして入手した城島（マリナーズ）、A・ジョーンズ（ブレーブス）、ダイ（Wソックス）、マウアー（ツインズ）のバットを参考にしたモデルを2種類注文。実際にティー打撃も行い感触を確かめた。

「城島は同じ右バッターでタイプ的に似ているかなと思ってみたけど、自分には細かった」

夜まで続いた恋人探し。「でも来て良かった」。わずか59試合の出場で打率・221、7本塁打、29打点に終わった06年。この屈辱は来季、必ず倍返しする。そのためのパートナーが見つかった。

（畑野　理之）

㊦バット職人・鈴木隆三さん（右）の熟練の技に目を凝らす㊨今岡（左）は「グリップエンドを少し厚くしてください」と伝える



最高の1本求め魂込める

素材は最高級

○…バット製作30年の鈴木職人はこの日も手でアオダモを削っていた。約20分でバットの形に仕上げるが「難しいのはむしろ材木選び。今岡選手の場合は100本のうち1本ぐらい」と最高級の素材しか用いない。33.5インチの長さとその形状は平均的だが「870グラムから920グラムまで幅広い重さを使い分けている点が珍しい」と特徴を語っていた。